

◎ 連合会だより

7月28日、第8回目のトップセミナーの初日は、はからずもアトランタオリンピックの女子マラソンの有森裕子の激走の日でもありました。史上最大の選手団を送った日本の結果はぼちぼちでした。国と国とのたたかいが、冷戦終了後なりをひそめたのとは裏腹な商業主義に振り回されたオリンピックの中で、理念なき「スポーツ集団」のもろさを露呈した結果だと思えます。それにひきかえ、南アフリカとアイルランドの選手の活躍には光るものがありました。

期待の高まりと現実の間で悩むとき、自らの目ざすものの理念、目的そして原則がしっかりしているか否かが決定的だと思います。

今回のトップセミナーでは労働者協同組合法を現実的課題として、労働者協同組合の現実と自己改革とが大きなテーマとなりました。その根本は人間賛歌です。そして古くて新しい団づくり。人

としてあたりまえの生活をあたりまえのこととして実現できること。すべての人々が限らない可能性を持ち、お互いの力を十分に引き出すための最大限の努力を抜きに協同組合は成り立ち行かないこと、労働を手段でなく目的として人間化していくこと、といった協同組合の原点の再確認を出発点とし、一人一人の幹部の人としての姿勢の自己点検と自己改革の必要性を痛感させられたトップセミナーでした。したがって討論の中で「自らを振り返らない」発言は手ひどく批判を受ける結果となりました。討論の時間が十分でなかったので、次回はもう1日増やす可能性もあります。講演いただいた東邦学園短大の山極先生の話には参加者一同、問題意識がぴったりとかみ合い確信を深めました。生活協同組合共立社の山中専務にもあらためてお礼を申し上げたいと思います。

鍛谷 宗孝 (労協連合会・専務理事)

◎ センター事業団だより

8月1日久しぶりの大きな病院の立ち上げが東京で始まった。長年の念願叶い受注した立川相互病院の清掃業務である。東京ブロックが一丸となり全責任を負った立ち上げとして、新しい地平を切り拓くことが期待される。同時に、この経験が若い事務局員にとって、仕事をおこしていくことの大変さと尊さ、そしておもしろさを身に刻んでいくこととなるだろう。そしてこのエネルギーが、9月14日の東京高齢者協同組合設立のバネになることを期待したい。

ちょうど同じ1日には、2回目の全国事業所長会議が持たれた。1回目の悶々とした雰囲気は何とかしようと、午後から4つの分散会に。2ブロックがひとつの分散会を構成し、他ブロックの本部長が司会をやるという新しい試みであった。結果的には、受け身での参加から、発言を必ず約束され、且つ小規模で深めるスタイルが定着していけばと願う。もう一つの目的は、司会をやるプロ

ック本部長の会議の作り方が全国的に検証されるということであり、ブロックの質を向上させていく一つの方策にしていきたい。いずれにしても、今までと違った会議の中身への新鮮な一歩だった。

我が身にとっては原点ともいべき夏の甲子園も始まった。今の自分を形成しているのは、高校時代の後悔と懺悔を根としているように思う。人は多様に変化しうる。人は柔軟に事象に対応しうる。要は自分を自分以外の立場や存在になって考えられるかだ。難しいことだができないことはない。人間に与えられた「客観化」という能力を、自分と社会のためにフルに発揮させねばならない時代が今だ。新しい自分と新しい歴史に向かうべく、1996夏に誓って。

古村 伸宏 (労協センター事業団・事務局長)